

【連載】

日中学術交流の現場から 第五回

北京から第五福竜丸元乗組員の市民科学者、
大石又七さんへの手紙

—第二便—

山口直樹(北京日本人学術交流会責任者)

はじめに

拝啓 大石又七さま

こんにちは。山口直樹です。

前回書いた第一便に続き、第二便をお送りします。

5. 大石さんが、キリ島で出会った多田智恵子さんに仙台で会いました。

大石さんは、原水協の企画により 2002 年 2 月 26 日から 3 月 10 日までの日程でマーシャル諸島を訪問されたそうですね。核の実験場にされて、生活の場を奪われたマーシャルの人々と交流する機会を持てたことは非常に貴重であり、有意義なことではないかと思えます。第五福竜丸の元乗組員では大石さんが、はじめてですね。

そして 3 月 3 日、4 日には、マーシャル群島のキリ島をも訪問されたそうですね。

アメリカは、1946 年 1 月にビキニ環礁を核の実験場に決め、島民たちを強制的にロンゲラップ島に移住させ、1948 年からキリ島で暮らさせるようになったとのことですが、このキリ島は、別名、監獄の島と呼ばれているとか。援助漬けにされた人々は、特にすることもなく働く意欲をそがれていたそうですね。

そのような島で大石さんは、日本から来ていた多田智恵子さんと出会っています。

大石さんはその時のことをこう書いています。

「俺はマーシャルを訪問中、一人の日本人女性に出会った。青年海外協力隊としてキリ島に来ていて小学校の先生をしていた宮城県出身の多田智恵子さんだ。この小さな島に1000人もの方が住んでいる。その中で日本人はただ一人、それもうら若き女性、よほどの強い意志と信念がなければ務まらないと思った。「大変だけど日本に帰りこの経験を生かして教師を続ける」と頼もしい多田さんだった。日本にもまだこのような若者がいた。」(254頁)『ビキニ事件の真実』(みすず書房 2003)

大石さんによれば、多田さんはマジロ環礁に一番近いアルノ環礁でマーシャル語の訓練を五週間受けてキリ島に来ていたのだそうですね。

「アルノでも戦時中、日本軍が玉砕し、周りの島にはまだたくさんの遺骨が残されているという。俺はかねがね思っていた。モーニング姿で靖国神社を参拝して大騒ぎする前に、大臣や議員たちはこういうところに来て、まだ成仏していない英霊を一体でも多く持ち帰ることのほうが先ではないのか。従順な気持ちで天皇や国を思い、命をささげた一兵卒こそ真の日本人だと思う。戦争を知らない議員たちにはそれがわかっていない。こんな大切なことを若い女性に言われてしまい、俺は恥ずかしかった。」(255頁)

南洋で玉砕した日本兵には、石橋湛山のような政治家の息子もいます。湛山は、靖国神社だけでなく元号の廃止をも主張していました。モーニング姿で靖国神社を参拝して大騒ぎする議員たちとは大きく異なった政治家でした。そうした政治家が自民党にいたことなど信じられないほどの地点に私たちは来ていると思いました。

実は、私もその後、宮城県にもどってきた多田さんに一時帰国したとき2013年にお会いしました。

実は、マーシャル群島やその島民たちを直接知る日本人として貴重な存在だと考え、多田さんの活動には以前から注目しておりました。彼女は、『きょうもえんまん—ビキニ環礁を追われた人々と暮らして』(健友館、2004年)という本も書いていますが、「えんまん」とは、マーシャル語で「元気」というような意味なのだそうですね。

仙台で多田さんに会って話していた時、彼女が2011年3月11日、宮城県の荒浜小学校で被災していたことを知りました。宮城県の荒浜というのは、夏は、海水浴場になるところで私も夏場は、たまに足を運んでいたところでした。そこが地震による津波の直撃を受けて大きな被害を受けていたのでした。多田さんは、津波が近づいてくる間、「ひょっとしたらこれで死んでしまうかな」という思いが頭をよぎったとっていました。四階建ての荒浜小学校の屋上に避難し、なんとか難を免れたといます。二階までは完全に津波でやられたそうです。そして自衛隊のヘリコプターで救助され、助かったようです。

私の知り合いでもある宗教人類学者の山形孝夫氏は、その時のことを書いた多田さんの手記を「実存的で真摯だ」と評しています。私も2011年の3月9日の夜までは、仙台にいたわけで少し仙台を離れるのが遅れていたらどうなっていたかわかりませんでした。

ともかくお互いの無事を喜び、共通の知人である大石さんの話をしていました。多田さんに会ってみると大石さんをはじめ、共通の知人がいるということがわかりました。

6. 吉永小百合さんと大石又七さん

大石さんの精神的支柱になっている存在としては、まちがいなく女優の吉永小百合さんの名前をあげることができるでしょう。

大石さんは『ビキニ事件の真実』で「1997年10月21日、大田区田園調布、嶺町文化センターに300人を超す人たちが、入場整理券を手にして集まった。女優の吉永小百合さんの原爆詩の朗読を聞くためである。」(188頁)と書いています。

そして「吉永小百合さんの顔が見られる。詩が聞ける」と一週間前からそわそわしていたうちのお母ちゃんも、俺のすぐ後に店を閉めて会場に来ているはずなのに、姿が見えない。」(188頁)と書かれているところを見ると、奥さんも吉永さんのファンであるということがうかがえますが、その会場で大石さんは、吉永小百合さんに呼ばれたのでしたね。

吉永小百合さんは、そこで大石さんに「ビキニ事件のことはよく知っています。まだ小さかった頃、久保山さんの死がとてもショックでした。私が原爆詩を朗読するようになったのも、そのことが一つのきっかけなんです。」といわれたそうですね。

それで感激した大石さんは、「芸能界にあって、優しくかよわそうにみえる吉永さんが、ボランティアで平和問題に力を尽くしている。優しさの奥に芯の強い平和への意志が秘められていると思った。お母さまも千葉の館山にある従軍慰安婦の碑を建てた教会に鐘を寄付されている。」(189頁)と書いています。

実は、私は吉永小百合さんという日活映画『愛と死をみつめて』(1964)でミコこと大島みち子さんを演じた19歳の吉永さんが、まずは思い浮かびます。

この『愛と死をみつめて』は、本、テレビドラマ、映画、歌すべてにおいて爆発的なヒットを記録しました。戦後日本のメディアミックスの始まりと言われたりすることもあります。実を言いますと私は、吉永小百合さんが演じた大島みち子さんの小学校、中学校、高校の後輩にあたります。その関係で『愛と死をみつめて』(大和書房1963)の中国語版をコーディネートすることになったのです。そして吉永さんがもっとも大きな共感を示していたのは、大島みち子『若きいのちの日記』(大和書房,1964)のほうでした。この『若きいのちの日記』(大和書房,1964)を読んで感動し、往復書簡『愛と死をみつめて』の映画化を進言し、自ら大島みち子を演じたのは、他ならぬ吉永小百合さん、その人でした。

そして、その大島みち子さんは、1962年8月6日の日記に「今日は原爆記念日、昨日又ソ連が40メガトン級の核実験を再開した。私たちの常識では考えられないのが政治であり、政治家であるらしい。怒りよりも先に人間の訴える力がいかに弱いものか知って悲しい。原爆の被害どころか空襲の被害さえ知らない私だけこのごろつくづく人間の生命の尊さを感じ始めた。生きようとする人間を殺すほど、おごいことはない。」と書いていました。

この時期、日本は、高度経済成長期にあり、第五福竜丸のことも忘れられていた時期ではありましたが、「私たちの常識では考えられないのが政治であり、政治家であるらしい。」というのは現在も真実でしょう。私たちの常識では考えられない政治によって核兵器が増やされてきた。そうであるのなら私たちは、「生きようとする人間を殺さない」核兵器を廃絶する政治を追及しなくてはならないということでしょう。

かつて米ソ冷戦下では、資本主義圏の核は、悪だが、社会主義圏の核は、善だという考え方がありました。いわゆる「きれいな水爆」というのが、それですが、ソビエト連邦崩壊のきっかけとなったのは、

社会主義圏での「原子力の平和利用」のためのチェルノブイリの原発事故でした。2005年、北京大学の中国語の授業でゴジラについて説明していると中央アジア出身の留学生が、「私の出身の地域では、おかしな魚がいる」と反応してきました。彼はソ連時代の核実験場の近くの地域に生まれ育っていた人だったのです。社会主義圏の政治権力者にとっては「きれいな水爆」かもしれませんが、そこに住む人間や自然は確実に放射能に汚染されているということでしょう。

2017年11月5日、第五福竜丸記念館で子供たちの第五福竜丸を描いた絵画展が、吉永小百合さんをゲストに招いて開催されたという新聞記事を読みました。大石さんと吉永さんが並んで写っている写真をみました。なかなかよい企画だと思ってみました。

大石さんが、ビキニ事件の被爆者として平和を訴える活動をする「共産党員だ」という人がいますが、同様に吉永さんにも「共産党の広告塔」だとレッテルを張ろうとする自称文芸評論家の小川栄太郎のような人がいます。私は大石さんと吉永さんのお二人から党派性を感じることはほとんどありませんが、そのような枠組みにどうしても押し込めたい人たちがいます。

現にある政治権力を肯定すると何も言われぬのに現にある政治権力に批判的に対峙しようとする「あの人は政治的だ」という。その傾向がとりわけここ5年ほど、日本社会では強まっていると思います。

私が、DHCの番組「ニュース女子」のデマ放送に我慢できず、北京で沖縄の問題を取り上げたときなども北京の日本人社会から「偏っている思想の人たちの集まり」とか「政治的だ」という反応がきました。しかし圧倒的に権力関係が不均衡な時、安易に「中立、公平」に逃げることは結局、何もしないことに帰着してしまうのではないのでしょうか。

大島みち子さんは、医療ソーシャルワーカー(M・S・W)に展望を見出そうとしていた最後まで社会を見失うことのない女性でしたが、吉永小百合さんもまた社会を見失うことのない、知性を感じさせる大女優だと私は、思っています。

7. 第五福竜丸被曝に関する事実の歪曲について

大石さんに北京まで送っていただいた『矛盾—ビキニ事件、平和運動の原点』(武蔵野書房,2011)を読んで私が、一番立ち止まって考えさせられた箇所は、第五福竜丸被曝に関する事実の歪曲に関して大石さんが、述べているところでした。

大石さんは書いています。

「今、気になるのは、この重要な意味を持つ事件の記録が、当事者である福竜丸の内部から歪曲され始めてきたのを知り、どうしても付け加えなければならないと思った。

俺たちにとっては、不利になることかもしれない、だが、事実を曲げることができない。

「第五福竜丸事件を振り返って」という日本放射線影響学会第50回大会の市民講座が、幕張メッセ国際会議室で行われた。その時の記録を見て俺は驚いた。

特に驚いたのは、講演最後の締めくくりで司会のいった言葉だ。

「この市民講座では今まで誤解されていたこともいくつか修正された。漁労長の見崎さんご本人から『第五福竜丸のマグロには汚染はなかった』ということと『この実験ではキノコ雲は生じなかった』ことな

ど、誤解されていた学会員も多いかもしれない。」というものだ(196頁)『矛盾』(武蔵野書房,2011)

日本放射線影響学会という学会自体が、まず問題のある学会であるということは、労作、島菌進『つくられた放射線「安全」論—科学が道を踏み外すとき』(河出書房新社,2013)をよく読んでみると理解できてくることかと思えます。

そして、ここで、大石さんは、第五福竜丸の責任者である漁労長の見崎吉男さんへの違和感を隠していません。

「一般社会では責任者である漁労長の言葉を重要視する。これは事実ではない。嘘の証言だ。どうしてこの人たちは事実でないことを今になっていうのだろう。」(196頁)

「キノコ雲は生じなかった」というが、俺はこの目ではっきりと水平線上にもくもくと人道雲のような雲が上がっていたのを見ている。その雲が驚く速さで頭上を覆いつくして晴れていた空を曇りのようにし、真っ白な灰が落ちてきたのだ。

キノコ雲もださないでたくさん灰がふってきたというのだろうか?(197頁)

「半世紀も口を紡ぎ続けた見崎さんが、50年を境に突然口を開き、死んでいった半数に及ぶ主だった乗組員たちの証言もみな否定して、事実を知っている自分一人だ、などといい始めたのは何故だろう。俺から見ると見崎さんが自分の都合のいいように、あの航海のストーリーを変えようとしているようにしか思えない。」(197頁)

ここまで大石さんが、いわれるのですから尋常でない事態なのだと感じます。

見崎吉男さんは、一体なぜ50年を境に突然口を開き、死んでいった乗組員の証言を否定し始めたのか。ここからは決して目をそらしてはいけないものがあるように思われます。

大石さんは続けて以下のようにも言います。

「航海の責任者だった見崎さんは、先頭に立ってアメリカや日本の政府にそのことを訴え、死んでいった乗組員やその遺族の力になってほしい。命を落とした仲間に向かって「ヒバクとは関係ない」などと口が裂けても言っただけではないのだ。船乗りの責任者は、乗組員の命を束ねて預かっている。その自覚のないものに責任者としての資格はないと思う。

死んでいった乗組員たちも、ほとんどが表には出さなかったが、航海の失敗、被爆については、みなそう言っていた。退院するとき見崎さんは、「漁民、国民は納得しない。退院後の一切の責任は政府にとってもらいたい」とはっきりいっていたのに……」(198頁)

このビキニ事件は、アメリカが国際法に違反して水爆実験を行い、そのために起こった事件だったというのが、事態の本質であり、それを隠すために事実を捻じ曲げている可能性が高いと思われます。大石さんは、ビキニ事件の事実の捻じ曲げには、断固として闘っています。

この非妥協的な大石さんの姿勢は、第五福竜丸の乗組員の中では突出していると思います。

トーンが弱まったのは、漁労長の見崎さんだけではなく治療にあたった担当医師もまた同様なことが起こったと大石さんは、書いています。

「国立東京第一病院の担当医だった熊取敏之医師も、久保山局長がなくなったとき死因は放射能症性肝硬変」と発表し、涙を流してアメリカの行為に怒りをぶつけた。だが、ビキニ事件がきっかけで国が千葉県に作った放射線医学総合研究所の所長に納まったところから、発言の内容が変わり始めた。NHKが「又七の海」というスペシャル番組を制作中、ディレクターが質問書を出した中で熊取医師は「染色体の異常は受けた放射線の影響だと思う」「C型肝炎は輸血によるものと考えざるを得ない」としながらも、全員の生活歴を調べてみないと断定できないに変わった。

染色体異常は俺にとっては大きなかわりがある。最初の子供は奇形児で死産だった。そして久保山さんの死因も「科学的根拠がもう少し必要」と後ろ向きになった。」(199頁)

見崎さんが、第五福竜丸乗組員の病気や死を被曝とは関係がないと言い出す時期もまたこの時期だったそうですが、これが何を意味しているのか、考えこまざるを得ませんでした。

元乗組員の小塚博さんが発病したとき、保険適用を申請しようとして船の責任者だった見崎さんに同行をお願いすると、「きっぱりとあきらめることも大切だ」といって同行を拒否されると大石さんは語っていますが、これは当事者にしか語りえない重要証言です。なぜ拒否するのか首をかしげざるを得ません。

「俺の発言は平和運動とは違う。被曝のために死んでいった仲間たちが、口を閉ざされ、小さくなって逝ったくやしさを、怒りを代弁するところから始まった発言だ。核兵器も世界中に増える一方。怒りも頂点に達して俺は口を開かずにいられなくなったのだ。

家族からも自分から不利になることをいわなくても、といわれていた。」(201頁)

という大石さんの発言からわかるのは、問題を単に個人主義的にとらえるのではなく、公共的、社会的な問題としてとらえようとする姿勢です。

「不利になろうと嫌われようと、本当のビキニ事件の真実を正確に伝えよう、そう思った」(219頁)

と書かれていますが、これが私が、大石さんを市民科学者だと考える一つの理由でもあります。時として故郷とは、辛い場所でもあります。

「広島、長崎の市長は一貫して核兵器廃絶を訴え続けている。焼津市長のほうが先頭に立つべきなのに逆にアメリカの核の傘を容認し続けた。ここに住むには強い保守党に迎合しなければ、生きにくいのか、マスコミもジャーナリストも同じだった。」(200頁)

という状況であるならば、大石さんが焼津を出て、東京の匿名性に逃れるのもある種の必然だったといえるかもしれません。

そして大石さんは「ビキニ市民ネット焼津」という平和運動の組織について以下のように言及しています。

「ビキニ被災50周年を機に地元焼津に「ビキニ市民ネット焼津」という平和運動の組織ができた」と静岡新聞が報じた。合言葉なのか「焼津流」という言葉が掲げられていた。

その幹部の人たちが、口をふさごうとしているのか俺の行動を共産黨員であるかのように言っていると聞いた。被爆者の苦しさや核兵器の怖さを伝えているのに、核兵器や平和運動というのはどうしても政治に結び付けられ、そんな目で見られる。とても残念だ。」(201頁)

実は私は、「ビキニ市民ネット焼津」の中心にいる加藤一夫氏とメールの交換をしたことがあります。それほど悪い感じを持っていたわけではないので、どういうことをやっているのか問い合わせたのでした。

加藤一夫氏は、もともと国会図書館勤務の人で、植民地の図書館などを調査研究したりしている人で私の関心とも重なるところがあり、前からその仕事には関心を持っていましたが、焼津に静岡福祉大学を創設し、その学長をやったりしていたようです。

大野光明・小杉亮子・松井隆志編集『社会運動史研究2—「1968」を編みなおす』(新曜社,2020)では以下のように語っています。

「90年代はPKO法での海外派兵など政策転換が始まる時期だが、僕は、東京を離れ、静岡へ移った。焼津市に短大を設立、その10年後に四年制の福祉大学を作って学長もやった。同時に焼津は第五福竜丸の母校なので、「ビキニ事件」をとらえなおすため、地域社会運動を始めた。「やいづ平和学」講座を開始、その受講生を中心に「ビキニ市民ネット焼津」の活動が動き出した。最初は大いに盛り上がったが、3・11と原発事故で転機を迎えた。浜岡原発の問題に取り組むようになると創価学会の人たちが会を去り、新たに脱原発運動の組織の立ち上げが必要となった。」(173頁)

「浜岡原発の問題に取り組むようになると創価学会の人たちが会を去り」という部分がなかなか考えさせられますが、「ビキニ市民ネット焼津」では見崎さんと長く交流されていたようです。

加藤一夫著『ビキニ・やいづ・フクシマ—地域社会からの反核平和運動』(社会評論社2017)においては見崎さんの追悼文も書かれています。

この本に収録された「海のサムライとして生きる—見崎吉男第五福竜丸漁労長を追悼する」がそれですが、見崎さんが、第五福竜丸を静かに海に沈めてしまいたいと考えていたことは、ここでも言及されています。

そして見崎さんの『千の波、万の波』に収録された以下のような文が引用されています。

「人は10人いたら10の考え方が出てきます
気持ちを大きく持って、遠くを見て特定の考え方に支配されず
公明正大な指針なく判断できる精神力を養うこと
大事なところはしっかりと自分の考えを話し、しっかりと相手の話も聞く。
立ち止まり考え、つまずいて模索して、時に悩みながら「対話」をして
そこからまた新しい宿題をだしていきます。

『あなたと同じだから』話がまとまるのではなく

『あなたと違うから』こそ話し合い、耳を傾けよう。

お互いの心の扉を開いたとき、自分にとってこの人は大切なひとだとわかってくる。

そして豊かでおおらかな人間関係をつくることができる。

平和運動の原型がここにあります。

(以下略)

ここで述べられていることに違論があるわけではありません。

しかし、大石さんの話から考えるにここでの問題は、見崎さんが、口を閉ざされ死んでいった第五福竜丸の乗組員たちの声に応答し話し合い本当に耳を傾けたのかどうかということです。「共産黨員」や「アカ」というレッテルを貼って排除してこなかったか。まさに大石さんの本のタイトルのとおり「矛盾」しているのではないかと私は感じました。

作家の曾野綾子が、「考えの違う人とこそ対話する必要がある」という意味のことをどこかに書いており、それならと経済評論家の佐高信氏が、曾野綾子に対談を申し込むと「考えが違うようですので」と断ったという実話があります。

「いっていることとやっていることが全然違うではないか」と佐高氏は思ったといいますが、私はその話を思い出しました。死者を鞭打つようであまり気乗りはしませんが、ここは問題の根本をはっきりさせる必要があるように思います。

大石さんによれば、

「当時、発病や死の知らせは、仲間たちから俺のところ、先に届くようになっていた。だが、1993年ごろから「福竜会」という名前が新聞紙上で元乗組員たちが知らないところで独り歩きを始めた。それが会報のように見崎さんの会長名で一方的に送られてくるようになった。内容は乗組員が心配している病気や死のことではなく、ほとんどが事件とは無関係のものだった。」(205頁)『矛盾』

事件とは無関係の内容のものが、一方的に送られてくるというのは、対話しているとは言えないでしょう。これでは、言っていることとやっていることが、違うといわれても仕方がないのではないのでしょうか。

また、大石さんは、

「そうした中に「俺たちに近づいてくるものは、みな共産党系のものだから気をつけろ」とか「マスコミなどにはかかわらないで静かにしていよう」「ビキニ被爆者とか元福竜丸乗組員であることなどみんな忘れるほうがいい」「不信の念あれば人間失格だ」とまで書いて事件を口にしないように仕向けるものだった。」(206頁)

とも述べており、ビキニ事件の真実から目をそらさせる意図を感じてしまいます。

「ビキニ事件は不可解なことが多すぎる。俺たちにとっても重要である福竜丸の『航海日誌』が国会

で被曝位置が発表された後、消えた。」(204頁)

と、大石さんは書いていますが、消えたのは『航海日誌』だけではなく『無線日誌』も同様に消えたそうですね。

重要な日誌が、そんなに簡単に次々と消えてしまうものなのでしょうか。

また、2006年TBSが、アメリカの公文書館から入手してきた『当直日誌』のコピーを、第五福竜丸展示館にある『当直日誌』(現物)を比較してみると事件当日の3月1日の内容が明らかに違っているとか。

これは明らかに何者かによって書き換えられているということの意味していますね。

こうした事実も粘り強い調査によって明らかになってきたことであり、大石さんの執念を感じさせられます。具体的な事実に基づいて真実を明らかにしようとしている点、そして首尾一貫した主張をし続けている点、被抑圧者の視点から常に発言している点、この三点において見崎さんよりも大石さんのほうが、市民科学者の条件に合致していると私は考えます。ビキニ事件についての事実の歪曲を許してはならないでしょう。正確な事実を後世に残すことは、市民科学者の闘いの基本ではないかと思います。

8. 天皇制・自衛隊・災害救助隊

それから私が、大石さんの『矛盾』を読んでいささか驚かされたのは、第二章に「人類の起源」という章を設け、日本の古代史や天皇制などにも考察を加えておられるところでした。これはこれまでの本には見られないことだったと思います。

大石さんは、高天原について以下のように述べています。

「『古事記』の冒頭、物語は天と地がこの世界に現れるところから始まる。そのとき同時に登場するのが神々が住む高天原という場所だ。『古事記』ではその後、高天原の神々が、地上へと降り、その子孫である天皇が国を治めていくことが描かれている。しかしすべての始まりである高天原についてそれ以上説明されてはいない。高天原とは一体何か。その存在はなぞに包まれている。ところが高天原は日本各地に伝承が残されている。奈良県御所市高天地区。古代大和政権の有力豪族の力が非常に強かった地域だ。ここは高天原そのものがあつたと伝えられている」(80頁)

大石さんは、田園調布学園の元教師で歴史研究者の荒竹清光さんの古代史の講義にはまってしまったそうですが、長いタイムスパンで日本史なり人類史をとらえ、ビキニ事件の意味を考えることは、重要だと思います。

ここで述べられている奈良県御所市出身の人物に1922年に水平社宣言を起草した西光万吉がいます。彼は、戦後、自衛隊を科学技術による建設的協力奉仕の和栄隊にすることを提唱しました。これだけを見れば、大石さんの思想と同じように思えるかもしれませんが、西光万吉は、1945年8・15以降も「天皇制は権力国家発生以前の原始高天原から権力国家止揚以後の高次的高天原へまで貫き通じる日本民族の史的理想の大道」(偶感雑記)と述べていました。「八紘一宇」の価値観を主張しながら自衛隊活用をいうことには、私は、問題を感じざるを得ません。西光万吉は、市民科学の人というよりむしろ臣民科学

の人だと私は、認識しています。

大石さんは、

「自衛隊も日本人なら日本の憲法を無視してはいけない。人殺しの訓練をする自衛隊ではなく、世界中で毎年起こる事故や災害に今、持っている最新鋭の船や飛行機を使っていち早く出勤し、人命救助と復興に力を尽くす「災害救助隊」に名前も内容も早く変わってほしい。それが世界から喜ばれ、愛され信頼される日本になる道だと思う。またそれが戦争をなくし、難しいといわれている核兵器廃絶にもつながっていくと信じている。道を誤らないためには過去をしっかりと学ばなければ正しい先は見えてこない。」(227頁)

と書いています。これは間違っていないと思います。

ただ、自衛隊は、ビキニ事件の年に、警察予備隊から自衛隊になったのですが、旧態依然とした価値観のまま「災害救助隊」と名前だけかえても実態が伴っておらず、派遣先から喜ばれることはないでしょう。自衛隊が、「天皇の軍隊」という価値観から解き放たれ、組織論を抜本的に改革してはじめて「災害救助隊」の実質を持つ組織となるのではないのでしょうか。

そうでなければ、自衛隊は永遠にゴジラのライバルであり続けるでしょう。

ちなみに1985年8月12日の日本航空123便が墜落した地点は、正確には御巢鷹山ではなく、群馬県上野村の高天原山の尾根であり、ここも高天原の伝承が伝わる地でした。

大石さんは

「俺たち昭和一桁は、幸か不幸か戦中、戦後を体験した。小沢昭一、野坂昭如、永六輔、山田洋次の各氏が語っていること書いていることは同じ時代の周波数を持っているのかすべて同感だ。なぜかすべて理解でき、同感だ。だが、年が三つ下になると戦争についての考え方が少しずつ違ってくる。その割合でどんどん若者が変わっていくのだから、半世紀もたつうちには黒も白に変わってしまうのかもしれない。おそらく、外国でもこれは同じことだと思う。それが怖い。」(144頁)『矛盾』

と書いています。

この後に聖路加国際病院名誉理事長の日野原重明氏の名前が、大石さんの「強い味方」としてでてくるのですが、宝田明さんはその日野原氏と『平和と命こそ 憲法九条は世界の宝だ』(新日本出版社2014)という共著を書かれています。この昭和一桁にぜひ宝田明氏も入れていただければ幸いです。

9. ヒバクナショナリズムを超えて

西岡昌紀という人が「数学史に関心があります」といってSNS上で私にメッセージを送ってきました。どこかで見たことがある名前だなどおもってよく見てみると、1995年に文芸春秋がだしていた雑誌『マルコ・ポーロ』で「アウシュヴィッツの強制収用所にガス室はなかった。」と主張していた人物でした。この人は、筋金入りの歴史否定論者あるいは歴史修正主義者であるといつてよいでしょう。

さらにこれは以前から気がついていたことですが、西岡氏はゴジラについても次のような発言をして

います。

「この作品は、日本の漁船がビキニ環礁での水爆実験によって被爆された際、日本人が抱いた恐怖と怒りの結晶である。――ゴジラは、日本人の怒りを体現し、この地上に現れた。――黒澤明監督の『生きものの記録』と共に、日本人は、この映画を忘れてはならない。」(アマゾンのDVDコーナーでの発言)

一見するとなんでもないような文章に思えますが、ここでは日本人＝水爆実験の被害者ととらえられています。だからゴジラは、日本人の怒りを体現して現れたと述べられる。しかし、ゴジラが日本人の怒りであるというのなら、なぜゴジラは日本を襲うのか、日本ではなく水爆実験を行ったアメリカをどうして襲わないのかという疑問も生じてきます。

西岡昌紀氏は、日本人だけが被爆したかのような書き方をしていますが、実はビキニ環礁で行われたアメリカによる水爆実験で被爆したのは、日本人だけではありませんでした。

マーシャル諸島にいかれ被曝したマーシャル人に接した大石さんには、これは言うまでもないことだとおもいますが、西岡氏の文章には、ヒバクナショナリズムといったものが現れているように感じました。

フォトジャーナリストの島田興生は著書『還らざる樂園―ビキニ被爆 40 年核に蝕まれて―』(小学館,1994)において次のように述べています。

「1954年3月1日マグロ漁船第五福竜丸が、ビキニ環礁近海で被爆した事件は日本人にとって広島、長崎に続く第三の被爆であった。それをきっかけに日本全国の原水爆禁止運動が大きく盛り上がり、世界の核兵器廃絶運動に少なからぬ影響を与えることになった。しかし、この事件だけにかぎってみれば、日本人が被った障害や死、放射能汚染、経済的損失などの被害面ばかりに目を奪われ、核実験場にされたマーシャルの人々に関心を払わなかったことも事実である。第五福竜丸の乗組員と関係漁民以外の一般の日本人までが、同じように被害者意識、反米感情、放射能アレルギーに浸り運動が抗議や批判の枠組みにとどまりビキニ核実験が、歴史的に日本人とどうかかわっているのか考えようとする人が少なかったのは、日本人の戦争責任感と密接に結びついている。ビキニ核実験とマーシャル島民の被爆に私たち日本人は大きな責任があった。」島田興生『還らざる樂園―ビキニ被爆 40 年核に蝕まれて―』(小学館,1994) (202頁)

「日本の敗戦の翌年ビキニに来たアメリカ軍の将校が、島を出ていかなければならないと島民に伝えたとき島民たちの頭によぎったのは、「黙って従え、意見を言うな。命令に逆らえば命はない。」と問答無用に島々を取り上げた日本軍の島民に対する横暴の数々であった。

抵抗すればどうなっているか知っていたからこそ従ったのだ。」(204頁)

「日本はアメリカが、マーシャル諸島を核実験場に使用するにあたって、その露払いの役割を演じたということを私たちは肝に銘じておく必要がある。日本人は、マーシャル人被爆者に対して、同じ“被爆者意識”や“被爆国民”として安易に接することは慎まなければならないと思う。」(204頁)

大石さんも当事者であるとはいえ、『ビキニ事件の真実』の中で以下のようにマーシャル群島と日本との関係を指摘しています。

「正式には大戦後にできた国際連盟が、1921年に日本に政治を委任した。そして日本も同じように日の丸や君が代、神社を押し付け、第二次世界大戦で敗北するまで30年間、南洋諸島を日本の植民地として支配した。しかしこの間、日本は1933年に国際連盟を脱退しているから南洋群島統治の法的根拠を失ったのだが、返還どころか委任条件の中にあった軍事基地施設をみとめないという条項を破って、島々に軍事基地を増設した。そして日本の敗戦と同時に、今度はアメリカ軍がもっと強力なミサイル基地をつくったのだ。」(245頁)

そして大石さんは、こう付け加えています。

「科学や人類の意識が進歩したなどといっているが何も進歩していない。どんなに利口な言葉を並べてもそれは自分たちの欲望であり、みな詭弁と言わざるを得ない」(245頁)

ここには文明批評家の目があります。

第五福竜丸が被曝した1954年当時、日本人の学者で日本人の被曝者以外、マーシャル人の被曝者に関心を示したのは、政治学者の大山郁夫氏と他数人ぐらいしかいませんでした。

軍事評論家の前田哲男氏の『戦略爆撃の思想—ゲルニカ・重慶・広島』(凱風社,2006)は、重慶爆撃から広島を考えようとした優れた試み(私は2003年12月に重慶で開催された植民地教育シンポジウムに参加しましたが、哲学者の高橋哲哉氏が、基調講演の中でこの仕事に言及していました。)だといえると思います。広島においては、被爆した一割が、朝鮮人被曝者でしたが、このヒバクナショナリズムによって長い間その存在を消されてきたといえます。私は、朝鮮人被曝者が、多いハプチョンという韓国の都市に留学した後、北京に留学してきた芸術を専門とする女性と知り合うことになります。同時に前田哲男氏が、『棄民の群島—マイクロネシア被曝民の記録』(時事通信社,1979)を書いているということは、まさにマーシャル諸島に日本人がどのような戦争責任があるかを認識していたからこそ書くことができた労作ということになると思います。朝鮮や中国、そしてマーシャル諸島への関心を通して私たちは、ヒバクナショナリズムを克服していく必要があるでしょう。

おわりに

『ビキニ事件の真実』の英語版の序文を書いたピーター・フォークは「第五福竜丸の生存者の中でも、立ち上がって声を上げ、核兵器中心主義に反対して活動しているのは大石さんただ一人である。大石さんは荒野の中の預言者であるが、彼のような人物の声が見過ごされることになれば、人類は確実に恐ろしい運命に脅かされることになるだろう。今この時点で、私たちは大石さんの勇気、知恵、そして展望に感謝をささげたい。大石さんは核兵器のない世界という展望の実現に、自己の存在そのものを捧げてきた人である。」と書きました。

これは大石さんのことをよく理解している人間の言葉といえるでしょう。

『第五福竜丸から「3・11」後—被曝者大石又七の旅路』(岩波ブックレット2011)を書いた小沢節子さんにも2014年8月に東京でお会いすることができましたが、そのとき小沢さんが言っていたのが、

「大石さんは決して上からものを言ったりはされない」ということでした。大石さんの勇気や知恵や謙虚さについて小沢さんは語っていましたが、大石さんが、「荒野の中の預言者」であるのは、大石さんが時に大きな犠牲を払いながら荊の道を歩いてこられたからです。春の花畑を散歩するのではない、まさに誰もいない荒野の困難な道を少数の支持者とともに歩いてこられました。

ピーター・フォークは続けて「さらに明るい面に目を向ければ、私たちは、奴隷制の廃止、植民地下の人民の解放、アパルトヘイト反対の闘いの成功など、多くの「不可能」と思われた政治的突破口を開いてきたことに気がつくだろう。これらすべての変革は、戦いを通じて勝ち取られてきたものであり、その時々政治的指導者たちというのは、正義の側に力関係が決定的に傾いた後にしか、その闘いに加わったことはないのである。」と書きました。

この「アパルトヘイト反対の闘争の成功」が達成されたのは、日本から遠いところにありますが、南アフリカ共和国です。この国では白人のアパルトヘイト体制を廃絶した黒人政権が、核兵器の廃絶を行いました。ある種の「奇跡」のようなことをネルソン・マンデラたちは政治を変えることによってやってのけたのです。決して大石さんが言っていることが、夢物語なのではないことを彼らは証明したといっただいではないでしょうか。

2011年4月30日に行った第32回北京日本人学術交流会で私は、「日中原子力テクノロジー再考」という報告を行いその最後を大石さんのメッセージを読み上げることで締めくくりました。

その後の質疑応答で北京大学日本語学科で江戸思想史を研究する中国人の先生が、「人間が自然を支配できると考えたところにそもそも人間の驕りがあるのではないか」という感想を寄せてくれました。これはゴジラのモチーフでもあります。



北京大学で「日中原子力テクノロジー再考」と題して、原子力を考える緊急特別報告をする著者

私は、大石さんの『ビキニ事件の表と裏』を市民科学研究室で書評したとき「これまで会った人物のなかで大石又七氏以上にゴジラ的な人物を私は知らない。」と書きました。

もちろん、これは悪い意味で言っているのではなくて、「ゴジラの足音を友の足音として聞き取る」人間にとっては最上の誉め言葉なのです。

これはドイツの批評家ベンヤミンの「夜の中を歩くとき頼りになるのは橋でも翼でもなく友の足音だ」という言葉をヒントにしたのですが、そのベンヤミンの友人には、劇作家のベルトルト・ブレヒトがいました。

ブレヒトは、「1954年ベルリンにおける世界平和評議会臨時会議」(1954年5月28日)において「日本やアメリカの諸都市には、この数週来、放射能雨が降っている。日本の住民は恐怖の念を抱きながら、いつも彼らの主要食料を運んできていた漁船を見つめている。なぜなら何千年もの間、所有主のなかった海や大気が、いま主人を見出したからだ。その主人たちは我が物顔に彼らの上にその権利つまり彼らを汚染させるという権利を行使している。

人類の健康は、何百年先まで脅かされているのだ。それにもかかわらず、この実験者たちの取材にあたった出版関係者たちはすべてを覆い隠し、かくすことのできないことはつまらないことだにごまかしてしまっている。」と第五福竜丸について書いてもいたのです。

このブレヒトもまた市民科学者の視点を持った劇作家でしたが、ブレヒトを日本に紹介した日本人に千田是也氏があります。その千田是也氏は、『第五福竜丸』(1959)で科学者の役を演じていました。また、千田是也氏は、女優、栗原小巻さんの師に当たる人でもあり、日中の文化交流に重要な役割を果たしてきた人です。このように様々な事象はつながっているということを感じさせられます。

市民科学者、大石又七さんの闘いが、報われることを祈り、大石さんの闘いを見守っていきたく私は、考えています。■

市民科学研究室の活動は皆様からのご支援で成り立っています。『市民研通信』の記事論文の執筆や発行も同様です。もしこの記事や論文に興味深いと感じていただけるのであれば、ぜひ以下のサイトからワンコイン(100円)でのカンパをお願いします。小さな力が集まって世の中を変えていく確かな力となる—そんな営みの一歩だと思っていただければありがたいです。

[ワンコインカンパ](#)

←ここをクリック(市民研の支払いサイトに繋がります)